

希求される秩序 「万延元年のフットボール」の想像界と象徴界

柴田勝二

1 「この時代」の居場所

大江健三郎は出発時から「民主主義」の支持者としての輪郭を滲ませながら、表現活動に携わってきた作家として眺められてきた。それは終戦時に与えられた「民主主義」と題された教科書に熱中した少年期から、障害を持つ長男との共生を主題とする様々な作品を世に送り、疎外される者と同じの地平を共有する可能性を創作と実生活の両面で問いつづける、三〇代以降の活動に至るまで、一貫してこの作家を支えつづける立場であったように見える。一九七〇年以降の表現に顕著になる、民俗学・人類学的な知見の取り込みも、文明社会の周縁的な存在をすくい上げようとする眼差しの表現として受け取られる。こうした周縁的な弱者、少数者の立場から国家の体制に対して抗議の声を挙げようとする者の存在をすくい取ろうとする文学として大江健三郎の作品を眺めるのは、松原新一の『大江健三郎の世界』（講談社、一九六七・一〇）から、小森陽一の『歴史認識と小説——大江健三郎論』（講談社、二〇〇二・六）に至るまで、一貫した流れであるといつてよい。体制への異議申し立てを希求しながら、むしろそれを現実化する革命運動への志向が減退していく状況を大江の世界の原点に置く松原の視点は、基本的にはその三〇年以上後に出された小

森陽一の論考にも維持されている。ここで小森が重視しているのは、『同時代ゲーム』（新潮社、一九七九・一一）に語られる「村——国家——小宇宙」と大日本帝国との間の「五十日戦争」に典型的に見られるような、少数者が国家権力に向けて示す抵抗の試みであり、それがアメリカへのテロリズムの根底にある精神を喚起させるといった形で、二一世紀の現在の状況を予兆しているという把握が差し出されている。

しかしここに描かれているものは、決して大江健三郎の文学世界の見取図ではなく、あくまでも小森陽一によって切り取られた大江文学の断面図というべきものだ。むしろ大江健三郎の表現に込められた現実認識を追っていくと、本領である小説の創作において、大江がムラ的な共同体へのアンビヴァレントな心性を示しつつづけていることが分かる。「谷間の村」の空間が繰り返し姿をあらわす初期作品の世界においても、『芽むしり仔撃ち』で閉鎖的なムラ社会への敵意を主人公に託す一方で、『不意の唾』（『新潮』一九五八・九）では、外部からやって来てムラの成員の死をもたらす要因をつくった通訳を、暗黙の合意によって抹殺する共同体の行動を描いていた。また『飼育』（『文学界』一九五八・一）の持つ抒情性も、明らかに谷間の村の閉ざされた空間に主人公の少年がとどまっていることを前提とし

でもたらされていた。

このムラ社会の閉鎖性を糾弾する一方で、そのなかにとどまっていようとする両義的な心性にこそ、大江健三郎の文学の核心が潜んでいる。この心性は様々に変奏されつつ作品に姿をあらわすが、それをもつとも典型的な形で浮上させているのが、代表作の一つである『万延元年のフットボール』（『群像』一九六七・一七）である。従来この作品は、主要人物の一人である根所鷹四が示す自壊的な情念や、先行する行動者たちを模倣しようとする身振りによって焦点化されるのが一般的であった。語り手である根所蜜三郎の弟鷹四は、かつて安保闘争に参加した経験を持つものの、その後は「悔悛した学生運動家」としてアメリカで演劇活動に加わっている。そして帰国した後に鷹四は兄の蜜三郎を誘って四国の郷里の村へ赴き、そこでフットボール・チームを組織するという名目のもとに地元の青年たちを集め、実際には朝鮮人経営者によるスパー・マーケットを「略奪」し、さらには途絶えていた村の念仏踊りを復興させるといった行動を起こしていく。後半の展開においては、フットボール・チームの組織という当初の目的は完全にカッコに括られ、百数年前に郷里の地で起きた一揆の指導者であった曾祖父の弟と、太平洋戦争の終戦時に朝鮮人部落を襲撃した際に死んだ「S兄さん」に自己を同一化しようとする鷹四の希求が前面に押し出されている。そして最後に鷹四は近親相姦の關係にあった白痴の妹が自殺するに至ったという「本当の事」の顛末を告白した後、霰弾銃をみずからの身体に撃ち込むのである。

こうした鷹四の形象は、大江の多くの作品にあらわれる自壊的な行動者の系譜に位置づけられるとともに、『性的人間』（『新潮』

一九六三・五）の「叫び声」（講談社、一九六三・一）の呉鷹男には見られない、他者を組織的に動かしていく者としての性格を示唆している。小森陽一の『歴史認識と小説——大江健三郎論』でも、この作品については鷹四の「転向」が問題視され、国家権力の圧力への抵抗者としては、むしろスパー・マーケットの経営者である在日朝鮮人の存在に比重が置かれている。この「転向」という言葉に含意されるように、『万延元年のフットボール』における鷹四の行動は、現実の政治的な地平から離脱していきがちなる傾向を示している。柄谷行人は鷹四のこうした側面と、想像力の表現としての行為への傾斜に、六〇年代末の革命運動の予示を見ていた。それに対して笠井潔はその長大な『万延元年のフットボール』論を含む『球体と亀裂』（情況出版、一九九五・一）のなかで、具体的な政治の場を逸脱して肥大していく想像的な昂揚が一九六〇年当時の闘争にもあったという認識を示し、その基底を成すスケープゴート、道化、カーニヴァルといった人類学、民俗学的な要素を収斂する「夜の王」的な存在として鷹四を括り出そうとしている。それ以降の作品群にも変奏されていくこうした要素が、一気に姿を見せるのが『万延元年のフットボール』であり、その点で大江の創作活動の転換点が、『個人的な体験』（新潮社、一九六四・八）ではなくこの作品にあることを笠井は主張している。また黒古一夫も「少年時の体験を六〇年安保闘争の経験に重ねて、喚起された土俗的祭祀を触媒にして、近代とは別の回路をもつ民衆の想像力とその生活の在り様を探ろうとする意図」をこの作品に見ている²。

これらの論に共通する、『万延元年のフットボール』が安保闘

争を踏まえながら、それを情念的な祭りの場として描いたという把握は否定されるべきではないが、重要なのはそれがあくまでも六〇年代後半を生きる作者の意識によって仮構されたものであり、そこから幕末と昭和を登場者の想像力が行き来するこの作品独特の時間構造がもたらされているということだ。その点についてはしばしば引用される『核時代の想像力』（新潮社、一九七〇・七）のなかで、大江は「万延元年と一九六〇年とのふたつの陣地をいったりきたりするボールのような意識が、もつとも重要なのだ」という認識のもとに、この作品の「かなり奇妙な時間構造ができあがって」といると語っている。またその前提となるくだりで大江は、この作品を初め「歴史小説」として構想し、その準備として様々な歴史小説を読み進めていくうちに、「結局どのような歴史小説の作家も、歴史的時間をさかのぼって視点をすえながら、じつはかれの想像力は、この現代に深く根づいている」（傍点引用者）ことに気づいたと語っている。その数行後にも、「万延元年に自分の想像力の触手をもつていきたいと考えながら、そう考えている自分自身の足をとらえている今日の現実をほうっておくことができない」（傍点引用者）というくだりが見られるが、それは万延元年である一八六〇年に加えて、執筆時の「この現代」から遡及されるもう一つの「百年前」の地点を浮び上げられることになる。

その地点とは明治天皇が即位した、近代日本の出発点を成す一八六七年という年である。『万延元年のフットボール』が発表された一九六七年から翌年の六八年にかけては、「明治百年」の記念する種々の行事がおこなわれていた時期である。政府が「建国

記念の日」を制定したのは六七年であり、翌六八年一〇月には「明治百年記念式典」が挙行されている。こうした動きに対して批判的な声が出されていたことはいうまでもない。「潮」一九六七年一月号におけるシンポジウムでは、報告者の色川大吉は「維新という革命的な事件を祝うというのではなく、明治以後百年というものを、ただ日本資本主義の一貫した高度化の過程というふうにとらえる、その生成発展の百年を祝うのだという姿勢に変わったことが出ていると思います」という指摘をしている。参加者は当然そうした「姿勢」を批判していこうとしている³が、『万延元年のフットボール』の執筆も、「明治百年」に対して大江が差し出した一つの視角にはかならない。もちろん大江は「明治百年」の節目を祝うためにこの作品を書いたのではないが、同時にこの節目に至る日本の近代を批判することのみ主眼が置かれていたのでもない。開国以来の百年間をあらためて振り返り、この国の新しい局面への方向性を探ろうとする志向は大江の内に明瞭に抱かれており、それがこの作品の基底を成しているのである。

2 〈去勢〉後の世界

この『万延元年のフットボール』の起点にある、作者大江健三郎の「現在」への眼差しを考える上で見過ごすことができないのは、三年前の長編である『個人的な体験』との関係である。笠井潔が『万延元年のフットボール』における、大江文学の転換点を指摘するにもかかわらず、この作品は『個人的な体験』

との連関を色濃く備えており、その地点から眺められねばならない側面を持っている。その連関をもっとも強く滲ませているのは語り手の蜜三郎であり、彼は『個人的な体験』の主人公鳥の明確な後身として作中に存在している。『個人的な体験』の末尾における、教師や研究者の世界と縁を切つて、外国人観光客相手のガイドをするという鳥の晴れやかな宣言は、知識人としての自己に対する去勢としての意味を持つものであり、彼の鏡像として存在しつづける赤ん坊の頭部の肉瘤が除去されることは、この去勢をイメージ化する帰結にほかならなかった。蜜三郎はこの「去勢」後の鳥を表象する存在にほかならない。赤ん坊の肉瘤を除去する手術を振り返る、蜜三郎の次のような述懐は、それが鳥にとつて何を意味したのかを週及的に物語っている。

最後の輸血の時には、赤んぼうの頭が、かれ自身の血と僕の血で汚れて汚れているのを見ると、わきたつ肉汁のなかで煮られているのではないかと思われた。そして血をとられて判断力の稀薄な僕の頭に、赤んぼうが瘤を切除されることは、すなわち僕自身が肉体的ななにかを切除されていることにひといきという認識の方程式が浮び、現実には僕は鉢の奥底が鋭く痛むのを感じた。

(3、傍点引用者)

この赤ん坊の頭部にあった瘤とは、とりもなおさず知的活動の動力となるべき「頭脳」の過剰さの暗喩にほかならず、それを取

り去ることによって、鳥——蜜三郎は現実世界に渡りあおうとする姿勢を付与されると同時に、自己を自己たらしめていた根拠を喪失することになる。その点では鳥の後身である蜜三郎は、鳥の展望を受け継ぐ形で、外国人観光客を相手とするガイドとしてあらわれても不思議ではない。にもかかわらず「翻訳者」という知的な営為の主体に彼が置かれているのは、この去勢の不完全さを物語るもの以外ではない。それは鳥から蜜三郎へと変容していく主体の優柔不断さを示すだけの設定ではない。現実に蜜三郎は作中の言動において、シニカルな非行動的人物としてあらわれるが、彼をこのような存在として象らせる背後にあるものは、おそらく去勢を成り立たせるための、社会の象徴的秩序の不在である。

ここで「去勢」という言葉を、超自我的な父の脅迫としてのフロイト的な文脈ではなく、他者的な存在を自己の内に繰り込むことによって、自己を失いつつ社会化していくことになる、ラカン的な文脈で用いていることはいうまでもない。ラカンにおいては、「主体自身を無力にするような他者 (l'Autre) としての他者 (l'Autre)」（佐々木孝次訳）⁴の内在化によって、人間は原初的な自己を喪失しつつ、社会の普遍的な地平に自己を押し出していくのであり、その意味で「主体は分割されて生まれる」⁵ことになる。「個人的な体験」は、鳥が赤ん坊や火見子によって担われる鏡像的イメージに囲繞されながら、この「想像界」を通過して「象徴界」としての位相を持つ社会的秩序に自己を位置づけようとする物語であった。しかしラカン的な象徴界が、基本的に「大文字の他者」(l'Autre)の具体化である「法、制度」的な秩序として表象される以上、去勢の代償としてこの秩序の

なかに組み入れられる必要がある。むしろその組み入れ自体が、象徴的去勢の示唆するものであった。

そこから鳥——蜜三郎における去勢の様相を眺めれば、蜜三郎の非行動的な輪郭は、それ自体が去勢を暗示していたと同時に、彼が知識人的人間としての営為から離脱し切れていないことが、その不成就を物語っていた。その背後に、彼の去勢を支えるべき社会の象徴的秩序の不在が想定されたわけだが、そこに『万延元年のフットボール』が一九六七年に発表されていることの意味があらわれている。つまりこの作品で作者が第一に問いかけてようとしているものは、決して七年前の安保闘争自体の意義ではなく、あくまでもそこに遡及しつつ語られる一九六七年の日本における、現実社会の混乱と混沌であるからだ。それによって蜜三郎は自己の「去勢」を完了しえず、「想像界」と「象徴界」の狭間でたゆたう人間としての曖昧さを示しつつづけているのである。『個人的な体験』の終盤で、それまで自身に慰藉を与えつつづける存在であった火見子から離れ、自己と等価的な存在感を放っていた赤ん坊の頭部の瘤を切除することで、鳥の鏡像的な対象は捨象されたはずであったが、『万延元年のフットボール』において、鳥の後身である語り手は再び自身の鏡像を伴わせている。頭部の手術を終えた赤ん坊は、形を変えてやはりここでも蜜三郎の鏡像として機能している。しかし『個人的な体験』やあるいは以後の作品においてとは異なり、『万延元年のフットボール』の子供はその知的能力の欠如を示唆されつつ、それ自体としては自己を表出する役柄から切り離されている。この作品の赤ん坊は、次のように叙述される静的な存在である。

赤んぼうは、あいかわらず大きく眼をひらいていて僕を見あげるが、かれが渴いているか飢えているか、または他の種類の不快を感じているかどうか、ということがいつさいわからない。薄暗がりの水のなかの水栽培植物のように、かれは無表情な眼をひらいて横たわり、ただもの静かに存在しているだけだ。かれはなにひとつ要求しないし、絶対に感情を表現することがない。泣くことすらもない。時どき、かれが生きているのかどうか疑われることもある。

(1)

ここに語られるものが、去勢後の蜜三郎の存在の暗喩的な表現であることは明らかだろう。「無表情な眼」を周囲に向けてつ、「もの静かに存在しているだけ」であり、「なにひとつ要求しない」という能動性の不在は、「菜摘ちゃん、蜜は九〇歳になつてからやつと癌にかかるよ、しかも軽い癌に！」と鷹四に揶揄される蜜三郎の輪郭と重ねられる。しかも自己を「ネズミ」に擬するように、蜜三郎自身が生活者、行動者としての卑少さを意識している。

それは鳥を受け継ぐ語り手が、ここでも依然として自己の鏡像に向き合う想像界の住人にとどまっていることを物語っている。しかしこの作品で赤ん坊よりもさらに色濃い鏡像性を付与された相手として語られるのが、自殺した友人である。この「朱色に頭を塗り肛門には胡瓜をつきさして裸で縊死」した友人が、蜜三郎に同一化の誘惑と恐怖を同時にもたらす鏡像として、こ

の作品に存在している。その属性を蜜三郎は明確に意識しており、「彼と友人とは大学の初年級以来、すべてのことにおいてつねに一緒だった」と記される類似性は「容貌についていっても現に鷹四にくらべてすら、むしろ友人の方が僕に似ていたのである」と述べられる外見上の親近と相まって、周囲の同級生たちに彼らが「一卵性双生児のように似ている」という評判をもたらしほどであった。この鏡像的な親近性が蜜三郎に、友人への懐かしさと恐怖感を同時にもたらしめているのは当然である。友人を死に駆り立てることになった、「人間の根底にとぐろをまいて、本当に恐ろしい奇怪なもの」が自己に内在する蓋然性を蜜三郎は想起せざるをえないからである。

3 秩序の不在

その点で『万延元年のフットボール』における語り手の鏡像は、『個人的な体験』の場合とは異なっており、肯定的な同一化を拒んでおり、それが蜜三郎が自他に示す姿勢を一層シニカルなものにしている。火見子や切除される前の赤ん坊の瘤が鳥に与えたような、慰藉につながる積極的なイメージを蜜三郎は周囲の鏡像から受け取ることができない。そのため蜜三郎は鏡像に向き合う想像界にとどまりつつ、その鏡像に同一化を拒まれることによって、そこから距離を取りつづけなければならない。にもかかわらず彼が自己の新たな居場所とすべき象徴的な秩序はこの世界には不在であり、境界的な位置で蜜三郎はたゆたいつづけなければならないのである。

この彼が置かれた世界の様相は、彼らが帰郷した村の描出に明確に託されている。『芽むしり仔撃ち』でも、谷間の村はへ日本への暗喩であり、その排他的な閉鎖性が、主人公の少年たちを否応なく異端的存在として括り出していた。一方『万延元年のフットボール』における村は、決して蜜三郎や鷹四や、あるいは鷹四の取り巻きの若者たちを排除するのではなく、すでにそうした明確な姿勢を外部の人間に対して持ちえなくなっている。村に辿り着いた際に鷹四は蜜三郎に「谷間の青年たちは、指導者なしでは、何ひとつちゃんとしたことをやれないんだよ」と言い、「悪い状況のなかで自己解放する方向をつかめない」と言いが彼らの悪しき特性であると指摘している。それはとくに現在の村の青年たちの性格としていわれているわけではないが、それにつづけて鷹四が「おれが谷間に戻って、そこに住みつづけている他人どものことで最初に理解したのがそれだよ、蜜」と語っていることは、やはりそれが現時点の鷹四の眼に映った村人の像であることを明らかにしている。

一方『芽むしり仔撃ち』で少年たちを疫病の蔓延する空間に放置した村の大人たちは、少なくとも取るべき態度や行動に対する優柔不断さを示すことはなかった。彼らにとっては、村の秩序を保持し、それを阻害する要素を排除することは無条件の前提であった。こうした共同体の総意として躊躇なく取られる方向性は、『万延元年のフットボール』からはすでに失われている。主に青年たちに仮託された村人は、個としても総体としても何らの主体性を持つこともできない人間の集まりとして語られている。村の文化的な連続性も希薄になっており、村の伝統的な食べ物であるチマキの作り方にあらわれた変化が、その端

的な例として示されている。現在のチマキの具には大蒜が入れられているが、太平洋戦争時以来、村に移住してきた朝鮮人労働者たちの習慣に染められる形で、大蒜入りのチマキが普及していったのだと、村の住職は説明している。それだけでなく、村の伝統的な生活習慣の多くは現在すでになし崩しにされており、年末に餅を搗くこともなくなつて、「誰もがスーパー・マーケットで、糯米と交換するか現金を出して買うかする」という状態になつている。また鷹四がフットボール・チームのメンバーを動員しておこなおうとする念仏踊りにしても、助役が「この五年ほどやらないなあ」という衰微のなかに放置されている。そしてこうした村の伝統、習慣の喪失と呼応するように、朝鮮人経営者によるスーパー・マーケットが、村の新しい経済的支柱としての力を振おうとしているのである。

このような次元でちりばめられている、村の文化的連続性の喪失が、一九六〇年代後半における日本の社会的状況を示唆していることはいうまでもない。六〇年安保闘争と『万延元年のフットボール』の間にある、一九六〇年代前半から半ばにかけての高度経済成長期は、市民の日常生活の基本的要件をなす耐久消費財の普及が著しかった時代であり、六一年には都市部でテレビ、電気洗濯機の普及率が五〇%を超え、六四年には電気冷蔵庫の普及率が五〇%を超えている。⁷『万延元年のフットボール』の「谷間の村」にもテレビは入り込んで来ており、村人が大晦日に「紅白歌合戦」を見るといふ話題が点描されている。観光、スポーツなどのレジャー産業が飛躍的に成長したのもこの時期であった。『万延元年のフットボール』で一つの焦点となるスーパー・マーケットの展開も急速に進み、セルフ・サービス店の数は一九六〇年末

の一四六五店から一九六六年末の五四四二店に増加している⁸。しかしこの成長は地域に密着した零細な商店を圧迫し、共同体のまとまりを希薄化する一因となった。農村部においても農業人口は低下し、離農や土地の放棄に歯止めがからなくなつていった。

こうした流れのなかで、人びとの関心は個々の日常生活に強く向けられ、国の同一性への意識や社会変革への意欲は低下していかざるをえなかった。三島由紀夫が「このままいけば『日本』はなくなつてしまふのではないかという感を日ましに強くする。日本はなくなつて、その代はりに、無機的な、からつばな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済大国が極東の一角に残るのであらう」（『産経新聞』一九七〇・七・七）と記したのは一九七〇年であったが、『万延元年のフットボール』に盛り込まれた大江健三郎の眼差しは、この三島の呪咀の言葉からさほど遠い所にあるのではない。たとえば食物を詰め込みつづけて醗く肥大してしまつたジンという女の身体は、明らかに物質的過剰のなかで同一性を失おうとしている日本人の姿の暗喩である。こうした象徴的秩序の喪失のなかで、蜜三郎は自己喪失としての去勢を遂行することができず、想像界の周縁的な位置にとどまりつづけねばならないのだといえよう。

この作品で積極的に想像界の住人として生きているのは鷹四の方であり、万延元年の一揆を率いた曾祖父の弟と、太平洋戦争の終戦時に起きた朝鮮人部落への襲撃における「S兄さん」という、二人の先行する行動者を鏡像として立て、そこに自己を同一化する意識と肉体の運動のなかに鷹四は身を投じようと

している。むしろ鷹四にとつては同一化の対象である鏡像自体が確定しておらず、みずから強調する「想像力」の営為は、第一にそれを望ましい方向に増殖させることに費やされている。たとえば万延元年の一揆についても、村を抜けて高知に赴き、そこで新時代の知識を仕入れたのが曾祖父であるという蜜三郎に対して、鷹四は「しかし、森の奥に練兵場を切りひらいて一揆のために百姓の乱暴息子どもを訓練したのは曾祖父の弟だし、その訓練方法は、高地で得てきた新知識によつた筈だ」と主張する。この鷹四の「曾祖父の弟にヒロイックな抵抗者の光輝をせおわたがる」姿勢に対して、蜜三郎は「反撥せざるをえな」いのである。また終戦時の「S兄さん」の行動をめぐる議論においても、鷹四は「夢のなかのS兄さんはいつでも輝きたてる微笑を浮べて、キラキラ光る短剣をふるっているんだ」という「ヒロイック」な像を与えようとしている。この「S兄さん」の像に対して蜜三郎はやはり、「鷹、それもまた、きみの夢からの記憶なんだ」といった冷淡な否認を与えている。蜜三郎の認識によれば、曾祖父の弟は兄の手助けで高地へと逃げ、さらに「海をわたつて東京に行き名前をかえて偉い人になった」人間であり、谷間の村を見捨てて成り上がった裏切り者にはかならない。また「S兄さん」は決して果敢な行動者ではなく、「谷間に復員して来た若者たちのうちで、軀をまかせる女土地を持つていない唯一のぐず」であり、村の「もの笑いの種」でしかなかったと断定している。

こうした先行者の像をめぐる二人の対峙は、彼らの間にある距離と重なりを同時に示唆している。つまり鷹四の言葉は曾祖父の弟や「S兄さん」から行動者としての「光輝」を増殖させようとし、蜜三郎はそれを剥奪しようとしているが、こうしたイメージ

をめぐる綱引きをしうる程度には、二人とも想像行為の主体として生きているからである。もつともラカンが鏡像段階の前提として想定する「寸断された身体 (le corps morcelé)」が、鷹四の側により強固に認められることはいうまでもない。鷹四は安保闘争後に渡つたアメリカでも、「おれは引き裂かれていると感じつづけていた」のであり、その分裂の状態で、四国の郷里の村に赴いた現在にまで持続している。だからこそ、その「寸断された身体」に統一性をもたらしべく、過去の行動者の像を肥大化させ、そこに自己を投げかけようとしているのである。見逃すことができないのは、この鷹四の「引き裂かれている」感覚が、彼の存在の基底を成しているだけでなく、皮肉な形で蜜三郎の生きる地平に彼を接近させていることだ。鷹四はその感覚と自己の実存との関わりについて、次のように語っている。

「(前略) ……しかしおれは引き裂かれていると感じていた。おれを引き裂くふたつの力のどちらに対しても内容をあたえて、それを見きわめなければ……考えてみればおれはいつも暴力的な人間としての自分を正当化したいという欲求と、そのような自己を処罰したいという欲求に、引き裂かれて生きてきたんだよ。そのような自分が存在する以上、そのような自分のままで生き続けたいという希望を持つのは当然だろう？ しかし、同時にその希望が強くなれば強くなるほど、逆に、そのようなおぞましい自分を抹消したいと願う欲求も強まって、おれはなおさら激しく引き裂かれた。(後略)」

(11)

こうした暴力への傾斜と、それを罰しようとするアンビヴァレントな欲求を抱えた人間として、鷹四は自己を規定している。彼が志向する二人の鏡像的な先行者も、当然この彼の欲求のあり方に沿った輪郭を付与されている。鷹四のなかでは、彼らはいずれも騒乱の中心にいながら、結果的に殺されることになる自壊的な行動者である。鷹四が示す暴力への傾斜について柄谷行人は、それが「深い源泉」を持ち、「左翼なのか右翼なのか」区別することができない端的な性格を示していることを指摘している。そして鷹四が霰弾銃によって自殺した後、曾祖父の弟が共同体の精神的な支柱として生きようとしていたらしいことが明らかにされることで、蜜三郎らに反省と希望がもたらされる成り行きに対して、柄谷は鷹四の「キリスト」としての属性を見ている¹⁰。

鷹四をキリストに譬える比喩の妥当性はともかく、この論に見られる、鷹四を最終的に共同体の秩序をもたらし者として捉える視点自体は尊重すべきであろう。つまり鷹四は決してみずからキリストたろうとしているわけではなく、死ぬことによつて何らかの教えを規範化するのでもないが、彼の内にある超越的な裁き手への希求は、確かに共同体の秩序への志向と連繋していくからである。『性的人間』（新潮一九六三・五）の「J」もやはりこの希求を担った者であり、痴漢としての行為によつて社会の規範を侵犯しようとする欲求に、「自己処罰の欲求が付属している」ことを彼は認識していた。この「J」や鷹四が希求する超越的な裁き手は、当然フロイトの想定する超自我的な存在を喚起せざるをえない。超自我とはいふまでもなく、「母を犯すな」に始まる、〈父〉によつて与えられた禁止の命題を内在化することで、主体にとつ

ての倫理的な規範に転化されたものである。それはカトリック・クレマンや佐々木孝次が指摘する「ように、ラカンにとつての『大文字の他者』に相当する審級性を持つ存在であり、その点では蜜三郎と鷹四は明確に対立し合うように見えて、実は〈同じもの〉を志向する者同士として結ばれているとさえいふことができるのである¹²。

4 〈ゲーム〉としての一揆

帰郷した四国の村で鷹四がフットボール・チームを組織することによつて目指そうとしていたものも、自己を共同体における異端としつつ、その象徴的な秩序を蘇生させることにあるといえよう。表題に取られている「フットボール」は、単に一つの目的を目指しておこなわれる集団的な肉体的行動を指しているのではない。重要なのはそれがあくまでもヘゲームの比喩において機能していることで、そこに含意される時間的・空間的な限定性が、彼が模倣しようとする万延元年の一揆と、さらにはそれによつて再び現出させようとしている安保闘争の昂揚に託された特性を示唆している。つまり先にも触れたように、鷹四がフットボール・チームのメンバーを率いて現実におこなうことは、スポーツの試合とは無縁な、地元のスーパーマーケットへの「略奪」であり、それに相伴う活動としての念仏踊りである。鷹四が蜜三郎に語る言葉によれば、「スーパーマーケットの略奪などは、実際のところ暴動でも何でも無い、小っぱけな空騒ぎにすぎない」のであり、むしろ「念仏踊りの太鼓や銅

籬」こそが「暴動の情念的なエネルギー源」であるという。そしてメンバーたちが「それに参加することで、百年を跳びこえて万延元年の一揆を追体験する昂奮を感じている」ことを鷹四は主張している。前の章でも鷹四は蜜三郎に、フットボール・チームを率いる行動によって「曾祖父さんの弟の精神の運動を、もつとも濃密に実感できるだろうじゃないか」と語っているが、こうした他者の「精神の運動」を自己の身体に呼び寄せる演技性に、鷹四が集団行動の組織によって企図したものをみる事ができる。

そこに鷹四が鏡像的な想像界の住人である所以が託されていることはいうまでもない。けれどもこの鏡像的な演技性は、それが「フットボール」のゲーム性によってイメージ化される限りにおいて、現実社会に働きかける直接性からは隔てられている。鷹四がその企図の実現のために、わざわざ四国の郷里の村に赴いたことと自体が、それが日本の社会現実一般に向けたプロテストとしての意味を持たないことを傍証している。鷹四の企図にとって重要であるのは、あくまでも「想像力の暴動」に身を投げかけることであり、名前も挙げられない、チームの組織に駆り出された地元の若者たちは、鷹四のこの想像行為を成就させるための道具的な位置に押し込められているのである。

それは彼が「追体験」しようとしている一揆自体の持つ、民衆運動としての意味をも相対化せざるをえない。大江健三郎が万延元年の一揆として語っている騒動は、成田龍一も紹介する¹²ように、慶応二年（一八六六）七月一五日から大州藩（現愛媛県）大瀬村に起きた「奥福騒動」を下敷きとしている。『新編 内子町誌』（内子町誌編纂委員会、一九九五・一〇）によれば、大瀬村の百姓福五郎は、村の貯米貸しを役人に断られたことから、激し

い議論となり、それを契機として当時民衆を苦しめていた物価の騰貴の原因が、暴利を貪る商人にあるとして、「徒党強訴を決意した」とされる。一揆の参謀役であった神職立花豊丸が、呼びかけに応じない村は焼き打ちにすると檄文で宣言したために、二〇を越える村々が豪商や酒屋を襲う一揆に参加したが、藩吏神山庄兵衛らの説得によって、わずか二日で一揆は終息することになった。万延元年のフットボールで描かれる一揆の経緯はこの「奥福騒動」とはやや異なっており、百姓たちが藩主に「拝借銀」を願い出て断られたために、蜜三郎、鷹四たちの生家にはかならない「大庄屋の根所家」が金を貸し出したが、百姓たちはその「貸付の利銀」と「貸地の利米」の高さを不平として、「大竹藪から竹槍を伐り出し、まず根所家を襲って母屋を破壊し焼き払った。次いで谷間の醸造家の酒倉を襲ってすっかり酔っぱらい、道々の豪家を襲撃しつつ暴動の参加者とふやしながら海辺の城下町まで押し出した」のであると、彼らの母親が説明している。

作中に語られる万延元年の一揆と「奥福騒動」を比較すると、大江健三郎が叛乱の契機を公権力への怒りから、「大庄屋」という民間の権力者への不満に転移させていることが分かる。つまり襲撃の対象に豪商や酒屋といった富裕な家を選ばれたことは共通しているが、作中の一揆においては、根所家はとにかく百姓たちに金を貸し出したのであり、彼らが暴動に走ったのはその利率の高さを不満としてのことであつたとされる。そのため蜜三郎らの母親は「一揆の原因」をむしろ「谷間の百姓たちの欲深さと依頼心の強さ」に帰着させているのである。そこからこの一揆は公権力への絶望的な抵抗というよりも、百姓たちが

みずから引き起こし、終息させた自己完結的な行動としての様相を色濃く備えている。蜜三郎たちの曾祖父の弟が、「自分自身の家を打ち毀して放火させた」という経緯は、この自己完結的な性格を端的に示すものであり、また曾祖父が弟を殺して一揆を収束に導いたという鷹四の見方も、この性格を強める意味を持っている。

こうした万延元年の一揆の持つ、自己完結的な叛乱としての性格が「フットボール」のゲーム的なイメージと結びつけられる前提をなしていることは明らかだろう。この性格はもちろん大江健三郎自身の施した意識的な方向づけであり、エッセイ『叛逆ということ』（『エコノミスト』一九六六・一）にはこの方向性が示されている。ここでは大江は「かつて自分が日本という国家あるいは日本人であることに叛逆する、という形でものを考えたことがない人間であることに気づく」ことを告白することに始まり、日本における民衆の叛逆の事例としての、江戸時代後期の一揆の特徴について論じられている。ここで主に取り上げられているのは「奥福騒動」ではなく、『万延元年のフットボール』の資料として挙げられている小野武夫編『徳川時代百姓一揆叢談』（刀江書院、一九六四・三——一九二七・七初版の復刻版）に所収される、文政四年（一八二二）に起こった「丹後の百姓一揆」である。これは作品においては万延元年の一揆ではなく、明治四年に再び起こった騒動の素材として取り込まれている。とりわけ農民たちの指導者となる「六尺有余の総髪の大男」は、同じ表現によって、曾祖父の弟が十年余の潜伏の後に姿をあらわしたものととして、明治四年の騒動の中心人物に擬せられている。

しかし大江が日本的な叛乱の典型を見出しているこの一揆の様

相は、むしろ作中で語られる万延元年の一揆に作者が託したものを端的に浮び上がらせている。「丹後の百姓一揆」は、大江の記述を借りれば「御用金がおおせつけられ、更に、万人講とか先納御預け米とか追先納とかいうものが次つぎに課せられる」負担の過重によって困窮した農民たちが、「暴動」に立ち上がったものである。庄屋、大庄屋の家を襲うその暴動を率いたのが、「六尺有余の総髪の大男」であったが、大江が印象づけられているのは、それが体制の転覆を目指した叛乱ではなかったことで、内実としては「秩序の枠内で、体制の枠内で、暴民たちが荒れ狂う」騒動にすぎなかった。一揆が終息すれば、その指導者を救出しようとする新たな暴動に民衆が立ち上がることは決してしないのである。その点で大江はそれが「文化的な暴動」であり、「一種のゲーム感覚すらある」という評価を与えている。大江の眼に映る一揆の指導者は、騒乱が始まる前にすでに「自身の破滅を見こしている」自壊的な行動者以外ではなく、一揆の暴動のさ中にも「秩序の感覚」が農民たちのなかを流れていることを大江は感じ取っている。

大江がこの「丹後の百姓一揆」に見て取った、秩序の転覆を目指すことと逆行する姿勢のなかで、「ゲーム感覚」を持った自壊的な行動者によって担われる暴動こそが、『万延元年のフットボール』において鷹四たちが志向する一揆のイメージにはかならない。「一揆」が「フットボール」というゲームと結びつけられる着想はそこから生じている。それは同時に万延元年の百年後の叛乱である安保闘争の持つ意味にも変化を与えることになる。大江は一九六一年のエッセイ『強権に確執をかもす志』（『世界』一九六一・七）で、六〇年安保闘争を総括的に振り返

りながら、それが自身の文学的モチーフでもある「強権に確執をかもす志」の具現化であり、そこに戦後の「デモクラシー精神の抵抗的・叛逆的要素」の噴出があったという見方をしている。興味深いのは、『万延元年のフットボール』においては、安保闘争にこうした意味づけとは別個の相貌が与えられていることである。その参加者であった鷹四は後に「悔悛した学生運動家」としてアメリカに渡って演劇活動に加わっていたのであり、そこでは鷹四の内にあつたであろう「強権に確執をかもす志」がすでに相対化されていることが示唆されている。帰国して四国に赴いた鷹四の想像力のなかで、百年の時間を隔てた万延元年の一揆と安保闘争が結びつけられているのは、安保闘争もまたこの時点では、ヘゲモニック的な昂揚感によって特徴づけられる場として捉えられているということを物語っている。そこに六年の時間を置いて安保闘争を作品のモチーフとして取り込みながら、大江が闘争の當時とは異質な意識によってそれを虚構の要素として機能させていることが分かるのである。

『万延元年のフットボール』を貫くものは、決して大江健三郎が安保闘争に対する感慨として抱いた「強権に確執をかもす志」の表出ではなく、むしろ新しい時代に向けてのこの国の再生への希求である。鷹四が自己の暴力性を罰する超越性を持つ「父」的な力を希求していたことと、蜜三郎が自己を象徴界の住人としようとしながら、その象徴界を支えるべき秩序の不在から、シニカルな観察者の域にたゆたっていることが、相互に照応しあう関係にあるのは、両者の重なりが総体的な構造として、この作品を支えているからにはかならない。いわば鷹四はフロイト的なコードのなかに、蜜三郎はラカン的なコードのなかに身を置いていると

いえるが、鷹四の希求する、自己を処罰する力の在り処が、個的な存在ではなく、厳然とした秩序の暗喩として受け取られる以上、両者を綜合する形で浮上しているものは、やはり象徴界的な秩序の不在という問題性であろう。

その時鷹四がフットボール・チームのメンバーを初めとして、村人を煽動する形でなされるスーパード・マーケットの襲撃が、『芽むしり仔撃ち』で村人が少年たちに対しておこなう振舞いと、等価的な記号性を帯びていることは看過しえない。つまり太平洋戦争下の村人にとって、感化院から疎開してきた少年たちが厄介な侵入者であり、積極的な排除が与えられる対象であったのと同様に、一九六〇年代後半の村に帰郷した鷹四は、その民族的な異質さによって朝鮮人経営者を他者として括り出し、排除の対象としようとするのである。この場合、白^{ベグ}という名の経営者が在日朝鮮人であるゆえに不都合な存在となっているのではなく、排除すべき対象を明確化するために、朝鮮人であるという、彼の民族的な同一性が強調されていることはいまでもない。大蒜入りのチマキを問題なく受け入れているように、村人にとっては外的な存在の浸食を蒙ることに現実的な不利益は何もなく、鷹四の煽動がなければ、スーパード・マーケットが村人の略奪に晒される事態も生じしえなかったに違いない。明らかに帰郷してからの鷹四は、みずからが排他的なヘムランの機能を現出する存在として行動しており、そこで彼が企図する「他者」の排除による共同体の同一性の強化は、自己を罰する「父」的な力への希求と連続している。鷹四が秩序の破壊者であるように見えて、実はそれに対する希求を持っているばかりか、現実の行動によってそれを仮構的にもたらそうとする者

であることは、こうした側面からも明瞭である。

5 「御霊」への同一化

鷹四が示す、「本当の事」への執着も、この志向との連関のなかで捉える必要がある。これは鷹四が「いったん口に出してしまふと、懷にとりかえし不能の信管を作動させた爆裂弾をかかえることになるような」と語る、主体に表出の誘惑と禁忌を同時に感じ取らせる事柄のことである。彼はこの「本当の事」の内容に言及することなく、その感触を蜜三郎たちに伝えようとしていたが、最後に白痴の妹が自分との近親相姦の末に縊死したという、中身に相当する出来事を語った直後、霰弾銃の弾を自分に向けて放つのである。「本当の事」として語られる内容が、それにつづく行為の烈しさと見合うだけの禁忌性をはらんでいるとはいえないことは明らかである。この「本当の事」をめぐる物語と行為のズレを考える際に見逃せないのは、鷹四の最期が冒頭で語られる、蜜三郎の友人の自殺の反復としての意味を持つことだ。「朱色に頭を塗り肛門には胡瓜をつきさして裸で縊死」した友人の行為について、蜜三郎は「伝達不能のあるもののためにのみ、死者が死を選んだのかもしれない」（傍点原文）という感慨を抱いていた。それは鷹四の自死に対する解釈としても読み替えることができる一文である。現に「8」章で鷹四は、その蜜三郎の友人の死に言及して「あの人は、頭を朱色に塗りたてて素裸で（それに妻は、したがつて鷹四もまた知ってはいないが、胡瓜を尻の穴に詰めこんで、と僕は考えた）首を縊ろうとしておそらくは、本当

の事をいおうか！ と叫んでから、そのまま首を縊ってしまったんだ」と付度していた。

もともとこの言葉は、「8」章のエピグラフにあるように、谷川俊太郎の詩「鳥羽」（『現代詩手帖』一九六五・一一）から引用されたものである。「何ひとつ書く事はない／私の肉体は陽にさらされている／私の妻は美しい／私の子供たちは健康だ／／本当の事を云おうか／詩人のふりはしているが／私は詩人ではない」（／は行換え、／／は連換え）と語られていくこの詩が差し出しているものは、世界の直接的な現前性の前で無力化されざるをえない言葉の宿命であり、その現前がもたらす感動を優先させるために「私は詩人ではない」¹⁴といおうとする詩人の自己相対化である。この詩のモチーフを考慮すれば、『万延元年のフットボール』における「本当の事」とは、すなわちそれを言葉に置換えしえず、無言の行為によってしか表現しえない対象にはかならないことが分かる。つまり鷹四は、妹との関係の顛末を語ることによって、逆にその剰余として残る、語りえないものを確定させてしまったのであり、その語りえない（本当の）「本当の事」の伝達のために、彼は自死したのだといえよう。それは鷹四が自身を一個の「御霊」に仕立てようとする行為にはかならない。鷹四が念仏踊りを復興させようとしたのは、それが「暴動の情念的エネルギー源」として重んじられたからであると同時に、「本当の事」を語った後の彼の（居場所）を差し出す契機ともなるからである。彼の自死は直接的には蜜三郎の友人の奇怪な最期を模倣しているが、その自死を、自身が目論んだ念仏踊りの興奮の残存する時点で、郷里の村で遂行することによって、鷹四は曾祖父の弟と「S兄さん」という二人の

霊の近傍に、自己の霊を位置づけることになる。彼が言葉によって語りえない「本当の事」の主体に自己を擬そうとしていたのも、そこに自己を追い込んでいくための前提にはかならなかった。そして御霊が本来祀られることによって共同体の守り手となる存在である¹⁵ならば、鷹四の行為は彼が密かに希求してきた共同体の象徴的秩序の回復に寄与する意味を持つことになるのである。現に村の住職は、「谷間の人間社会の豎のパイプが掃除され、若し連中の横のパイプはがっちり固められた」点で、鷹四の起こした「暴動」は谷間全体のために有効であったという評価を蜜三郎に語っている。また鷹四の死後、蜜三郎は曾祖父の弟が村を見捨てた成り上がり者ではなく、数年間の潜伏の後に、共同体のために力を振う者として登場したという事実に出会うのである。この時点で曾祖父の弟が共同体を統括する守り手として存在したことが明らかになる。その発見が蜜三郎のシニカルな価値観を相対化し、未来への積極的な展望を彼に描かせることになるが、この展望は確かに鷹四の未来における象徴的な「復活」を示唆している。

そしてこの鷹四の死が結果的にもたらした共同体の秩序への寄与を、蜜三郎は自身の身に呼び寄せる形で体現している。見逃すことができないのは、曾祖父の弟が籠っていたであろう蔵屋敷の地下倉に蜜三郎が入り込み、そこで「百年前の自己幽閉者がそうしていたであろうように奥の正面の石壁に背をもたせかけてうずくま」る姿勢が、全体の冒頭部で語られる、蜜三郎の「手足をねじまげ」た「胎児のような姿勢と明らかに照応をなしていること」だ。「夜明けまえの暗闇に眼ざめながら、熱い「期待」の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識を手ざぐりする。内

蔵を燃えあがらせて嚙下されるウイスキーの存在感のように、熱い「期待」の感覚が軀の内奥に回復してきているのを、おちつかぬ気持で望んでいる手ざぐりは、いつまでもむなしのままだ」というくだりに始まり、対象性を欠いた彼の意識の運動を映し取ろうとする冒頭部分は、『万延元年のフットボール』の特徴をなす箇所としてこれまで多くの論者の考察の対象とされてきた。

その際に着目されるのは、この一連の文章において意識の主体とその対象的な指向性の関係が曖昧にされている点である。それに対して片岡啓治は「日本の伝統的などという散文とも似ていない」¹⁶という感想を記し、柄谷行人はその主体の曖昧さから「この熱い「期待」の感覚は、「僕」という語り手のものでさえない。それは、この作品の基底に存する気分であり、「存在感」そのものである」という見方を示していた¹⁷。また小森陽一は『歴史認識と小説——大江健三郎論』の前に書かれた論考で、この部分に詳細な分析を施しながら、その文体的な晦渋さが「近代天皇制の言説体系」にはかならない近代の「日本語」のシステムを相対化する意味を持つという読解を呈示している。たとえば冒頭の一行に含まれる「辛い夢の気分の残っている意識を手ざぐりする」という文の「意識」が、主格ではなく目的格として使われることから、この一文に「主体が不在である」ことを物語っているという。その場合「眼ざめながら」と「熱い「期待」の感覚」の間に、「僕」という主語を挿入すれば、その統辞的構造は明確になるが、大江の文章はそうした主語——述語の対応という「英語的な文法意識」を排除することによって、「近代「日本語」文」の統辞法に逆行しようとしている

とされる¹⁸。

この小森陽一の解釈は、確かに冒頭部分の表現に対しては有効性を持つているが、重要なのはこの主語——述語的な統辞法を意識的に解体し、シニフィアン——シニフィエの照応にも揺らぎを生じさせた文体が、全体を貫いて維持されているのではないことだ。小森が指摘する独特の文構造は、あくまでも冒頭部分の特徴づけるものであり、むしろそこに大江健三郎の周到な構築への配慮を見ることが出来る。つまり大江は冒頭部分を、最終章における蜜三郎の地下倉での姿勢の先取りとして語っているのであり、ここで述語に照応するべき主語が曖昧にされたまま文が連ねられているのは、この主語の主体が、冒頭部分と結末部分における〈二人〉の蜜三郎を、重ね合わせた存在だからである。そう捉えることによって、冒頭部分に、ひいてはこの作品全体に大江健三郎が託したのを見て取ることが出来る。つまりその内容を示さないままカッコ付きで繰り返される「期待」という言葉は、それが自身の生に対して展望をもたらしものへの「期待」であるとともに、倉屋敷のある共同体によって端的に担われる〈日本〉の新しい展開に対する「期待」であり、この自己と共同体の間で帰属の先が揺れ動くがゆえに、「期待」の内容が確定されえないのである。

しかも大江は冒頭部分で蜜三郎に「胎児」の姿勢を取らせる事の意味を結末部分で呼び戻し、作品の円環的な構造を一層明瞭にしている。つまりこの時点においては、現実には一個の「胎児」が存在しているからだ。それは菜摘子がみごもった、鷹四の子供である。この鷹四の生命を受け継ぐ存在は、確かに「死——再生（復活）」というキリスト教的な枠組みを想起させるが、冒頭部分の

蜜三郎が「模倣」する「胎児」とは、この菜摘子の子宮の中の子供にまで敷衍されうる。それを示唆する伏線をなすべく、冒頭部分の叙述における主語——述語の統辞的照応が意識的に攪乱されていたのである。

そしてここに、『万延元年のフットボール』がはらむ、一九六〇年と一九六七年のズレが浮び上がっている。つまり一九六〇年の安保闘争と、その百年前に想定される一揆を結びつけ、それらを政治状況への批判性を希釈した、自律的な〈祭り〉としての性格によって重ね合わせることで前景化される、御霊信仰的な文脈は、その歴史的な一回性からの離脱によって、未来への連続性を浮上させることになる。そしてその連続性の起点に、発表時の〈現在〉である一九六七を置くこととする企図が見えてくるのである。その志向は先にも触れたように、一九六七の百年前、つまり一八六七年が日本近代の起点であることによって明確化されている。しかもこの方向性は冒頭部分に注意深く仕組まれている。「夜明けまえの暗闇に眼ざめながら、熱い「期待」の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識を手ざぐりする」という最初の一文が、「夜明けまえ」という言葉で始まっているのは、単に蜜三郎が浄化槽のための穴に身を横たえている時間設定を示すだけではない。それは明らかに、島崎藤村がライフ・ワークとして書き継いだ長編小説の表題を取り込んだものである。『万延元年のフットボール』の執筆に際して大江が参照した「歴史小説」のなかに『夜明け前』（新潮社、第一部一九三四・一、第二部一九三五・一一）が含まれていたことは疑いない。この長編小説こそ、近代の「夜明け」に至ろうとする状況のなかにうごめく群像を描く作品であった。しかも

主人公の青山半蔵の陥っていく狂気は、同時に『万延元年のフットボール』の蜜三郎が自身の内に潜んでいる可能性として危惧しなくてはならない対象でもあり、この要素によっても両者は媒介されている。『夜明け前』における日本の近代は未だ明確な形を取らぬ「胎児」の段階から始まっていたが、その未成性は、同時に『万延元年のフットボール』を執筆する作者が希求しつつ展望しえない、日本のへ新しい百年への不明確さと照応している。そのため、この作品の冒頭部分に繰り返される「期待」は、その内実を欠いた言葉として記されるしかなかったのである。

註

(1) 柄谷行人『終焉をめぐる』(福武書店、一九九〇・五)。

(2) 黒古一夫『大江健三郎論——森の思想と生き方の倫理』(彩流社、一九八九・八)。

(3) シンポジウム「明治百年をどう評価するか」(「潮」一九六七・一)。討論参加者は松本三之介、大石嘉一郎、市井三郎。「明治百年祭」に対しては、松本は「第一、明治百年の何を祝おうとしているのか、私にはまったく納得がゆきません」と述べ、大石はこの催しが「たんに老人相手の復古主義」ではなくて「若い青年層」にも向けられており、しかもそれを国が対外的にアピールする形でおこなおうとしているところに不満をもらしている。市井はこの催しに対して一定の理解を示しながら、「下積みの人間と、上層の参加意識をもっている自信に溢れたエンジニヤとの断絶」が定着してしまったことを、現在の近代化の問題として指摘している。

(4) J・ラカン『盗まれた手紙』についてのゼミナール(佐々木孝次

訳、『エクリー』弘文堂、一九七二・五、所収、原論文は一九五七)。ラカンは自己の社会化と喪失、疎外が表裏をなして生起する関係について、「わたし」の機能を形成するものとしての鏡像段階(宮本忠雄訳、『エクリー』前出、所収、原論文は一九四九)では、「鏡像的なわたしから社会的なわたしへの反転に始まるパラノイア性の自己疎外(alienation paranoïaque)」(傍点原訳文)を「ヒステリー性の抑圧」が端的に示すという見方をしている。しかしこうした主体の無力化や自己疎外に対してラカンが「去勢」(castration)という言葉そのものを宛てているわけではない。この言葉はあくまでもラカンの意を敷衍した上での比喩的な用法において用いている。

(5) J. Lacan, Séminaire XI, Seuil, 1973.

(6) しかもこの作品ではこの「狂気」の力が二つの鏡像を結びつける要素として作動しており、それが一層蜜三郎を圧迫している。つまり白痴に宿命づけられているらしく思われる赤ん坊の頭部に生じた異常が、蜜三郎から遺伝的にもたらされたものである可能性が示唆されているからだ。それは個人を襲った不条理な運命として提示されていた「個人的な体験」との差異を明確にしつつ、自死した友人——蜜三郎——鷹四の三者を結びつける要素をなしている。

(7) 『昭和史』(有斐閣、一九八二・七)による。

(8) もっとも大江自身の郷里である喜多郡大瀬村(現内子町大瀬)には、一九六七年の時点でスーパーマーケットは存在していない。内子地区全体においても、当時はチェーン店「愛媛スーパーチェーン」の「内子主婦の店」があっただけである。

(9) J・ラカン「わたし」の機能を形成するものとしての鏡像段階(前出)。

(10) 柄谷行人『終焉をめぐる』(前出)。

(11) カトリック・クレマン『ジャック・ラカンの生涯と伝説』(市村卓彦・佐々木孝次訳、青土社、一九八五・一、原著は一九八二)、佐々木孝次『ラカンの世界』(弘文堂、一九八四・一一)。これらの著作においては「大文字の他者 (l'Autre) —— 象徴界 —— 超自我」の等価性が、フロイトとラカンを結ぶ項目として明確化されている。

(12) 拙著『大江健三郎——地上と彼岸』(有精堂、一九九二・六)でも、すでに蜜三郎と鷹四の類似性を指摘している。そこでは現実世界を生きる足場としての自己同一性を希求しつつ、それを得ようとする行動が、彼らをへ死者たちの彼岸的世界に接近させてしまう逆説に、両者を介在する契機を見出していたが、ここではむしろそうした関係性を現出させてしまう、現実世界における条件を焦点化しようとしている。

(13) 成田龍二「方法としての『記憶』——一九六五年前後の大江健三郎」(『文学』一九九五・四)。成田は小野武夫の著作を初めとする広範な資料を紹介しつつ、大江が「つねに信頼度の高い資料集を『谷間の村』の一揆を描くときに参照していることがうかがわれる」という評価を与えているが、大江がそれらを踏まえて歴史上の一揆をどのように虚構化したかについては考察されていない。また小論で参照した「丹後の百姓一揆」に対しても成田の論文は言及していない。

(14) 引用は思潮社『谷川俊太郎詩集』(続、一九七九・一二)による。

(15) 一般に御霊とは早良親王や菅原道真によって代表される政治的な失脚者の霊を指し、それを慰め、彼らが現世の人間に対してなすであろう祟りを回避するべく催される祭が北野、祇園などの御霊会であった。それによって御霊は共同体に祟りをなすのではなく、それを守る存在に転化させられることになる。『万延元年のフットボール』における御霊はこうした本来の鎮魂の対象から逸脱した規定を与えられているが、それは蜜三郎の言

葉に挙げられているように、折口信夫の言説を大江健三郎が取り込んだことによってもたらされた性格である。大江が参照したのはおそらく『民族史観における他界観念』(『古典の新研究』角川書店、一九五二・一〇、所収)中央公論社『折口信夫全集』第十六卷(改訂新版、一九七三・八)に含まれる「念仏踊り」の項目である。蜜三郎が「折口信夫は、この新しい『御霊』のことを新発意と呼んで」というように、折口は新参の霊魂を「新発意」と称し、「未完成の霊魂が集つて、非常な労働訓練を受けて、その後他界に往生する完成霊となることが出来る」とする信仰が念仏踊りの基底にあると述べている。この折口的な御霊観を受けて、『万延元年のフットボール』の念仏踊りの輪郭がもたらされている。ここでは御霊の主体の政治性はほとんど考慮されていない。それは「完全到他界に居ることの出来ぬ未完成の霊魂」であり、それゆえそれが「将来他界身を完成させることを約束された人間を憎み妨げる」ことを回避するための祭り——御霊会が必要であるとされる。

(16) 片岡啓治『大江健三郎論——精神の地獄をゆく者』(立風書房、一九七三・七)。

(17) 柄谷行人『終焉をめぐる』(前出)。

(18) 小森陽二「『乗越え点』の修辭学——『万延元年のフットボール』の冒頭分析」(『文学』一九九五・四)『小説と批評』世織書房、一九九六・六。